

Fate/story of color

双葉破月

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

——これは

異端な少年と

その導き手たる王

そして、少年に絶対の忠誠を誓い

溢れ返るほどの愛を捧げた

一人の赤枝の騎士の物語。

目次

序章	1
誕生	8
王と子	19

序章

—— ”聖杯”。

それは、あらゆる”奇跡”を叶える力を持つ、万能の杯。

—— ”聖杯戦争”。

それは、七人の魔術師マスタが七人の英靈サーヴァントを召喚し、覇を競いあう究極の決闘劇。

過去、三度に渡り繰り広げられた聖戦だが、四度目を迎えた時、その戦いは破綻した。勝者に捧げられる無色の聖杯が、その権能を濁らせ、悪意に染まっていたのだ。

最初に気が付いたのは、此度の聖戦に招かれた一人の男だった。英雄たちの頂点に君臨する、未来千里を見通す眼眼を持った、一人の王。黄金に輝く鎧を纏い、その鷹のように鋭い瞳を以て、男は知みつた。聖杯の実態と現状、そして、遠くない未来に訪れる一つの出会いを。

だからこそ、男はこの戦いに背を向けることを決めた。臣下の礼を取りながら、その

実、彼を出し抜こうという愚かな思いを抱く男に実情のみを伝え、自らの首を落としてみせた。

それが始まりだ。

男に見捨てられた魔術師は、男の言葉の切り捨てた。

故に、第4次聖杯戦争は、男を召喚した者ではなく。己の力だけで汚染された聖杯に辿り着いた一人の魔術師殺しと、無念と共に聖杯を諦めた騎士王によつて、幕を閉じた。汚れは大本である大聖杯にまで及んでいた。これでは闘う意味などないと、魔術師殺しと騎士王は嘆き、怒り、他の魔術師達を説得した。

時計塔の天才は、苦渋の表情で説得に応じた。

今生の忠誠を誓った男は、影を帯びた笑みを浮かべる。

迷える教会の使徒は、無感動な顔で頷いた。

百余りの顔を持つ女は、仮面の下で唇を噛み締める。

未熟な青年は、不満げではあったが理解を示した。

奔放なる征服王は、残念そうではあったが何々と大笑する。

ある少女の為に出戻つた男は、絶望を隠しきれずに嘆いた。
 狂氣に沈んだ騎士は、狂つたままに生前の主へと懺悔する。

快樂殺人者は、そんなことは関係ないと笑つた。
 聖処女復活を願う侯爵も、意に介さず虚言を述べる。

この聖戦に勝者はいない。ただ、敗者がいるとすれば。それは、傲慢たる英雄王の言葉を聞かなかつた、その男ただ一人だろう。

最初に英靈を失つた御三家の一角である魔術師は、現実を直視し、そして、去つていったサーヴァントを思つた。

——王よ、貴方の言葉は決して間違つてはいなかつたのだな。

後悔と自責の念に駆られながら、誰よりも聖杯の汚染を取り除くことに魔術師は全霊を注いだ。他の者と手を取り合い、無色の願望器に戻れよと祈りながら。

2年が経つた。

聖杯の汚染は見事取り除かれ、それを見届けた英霊たちはそれぞれの思いを胸に、その地を去っていく。

最初に暗殺者アサシンが、マスターだった言峰綺礼を一瞥して消えた。

次に槍兵ランサーが、マスターであるケイネス・エルメロイ・アーチボルトとその妻、ソラウ・ヌアザレ・ソフィアりに頭を深々と下げて消えた。

続いて騎兵ライダーが、坊主とマスターを呼んで、ウエイバー・ベルベットの頭を豪快に撫でて消えた。

さらに狂戦士バーサーカーが、マスターになつた間桐雁夜に傅き、謝罪を口にして消えた。

魔術師キャスターは、狂つた笑みを浮かべ、マスターの雨生龍之介の名を叫びながら消えた。

最後は剣士セイバーだった。麗しい顔かんばんせを歪め、衛宮切嗣を、言葉すら幾つも交わせなかつたマスターを見つめていた。

曰く、此度の現界は無念しかない。

曰く、貴方と言葉を交わし、互いを理解できなかつたことが残念だと。

曰く、次があるのならば、今度こそ貴方を理解したいと。

曰く、次こそは必ず、”願ひ”を叶えてみせると。

そうか、と。切嗣は表情もなく頷いて背を向ける。そしてセイバーもまた、そんな彼に背を向けて消えていった。その様子を、アイリス・フィール・フォン・アインツベルンが、少しだけ寂しげに見守っていた。

そして、すべてのサーヴァントが消え、立会人たる遠坂時臣は小さく嘆息する。これで、終わったのだ。勝者のいない、聖杯戦争が。

そのさらに2年後。彼を見限った王が、数奇な運命のもと、一人の少年に招かれる。

玉座に深く腰を下ろした男は、傍らに現れた者に言う。

「エルキドゥよ」

「なんだい、ギルガメッシュよ」

「我^{オレ}は彼奴めが生まれてくることが、こんなにも待ち遠しい。彼奴こそが我が召喚者に相応しく、この我^{オレ}こそが彼奴の英^{サーヴァント}霊に相応しい」

口許を歪め、心底愉快だと言いたげな口調に、エルキドウと呼ばれた彼／彼女は可憐な笑みを浮かべた。

「ふふふ……そうだね、そうだとお。お互いがお互いに相応しい。僕も、会ってみたいものだ」

そうだろうと返し、男はただ広い蒼穹を見上げる。

「――■■■■よ」

その名を口にした瞬間、遙か彼方から鐘の音が聞こえてくる。それは誰かの死を告げるものではない。しかし、誰かの生を祝うものでもない。ただ、喚んでいるのだ。

「思ったよりも早かったね」

その言葉に頷き、男は玉座から立ち上がる。

「行つてらっしゃい。君の——君たちの旅路が、善きものでありますように」
「ああ」

そうして、男は座から消えた。

——
本^か霊^れを呼ぶ、召喚者^{マスタ}のもとへ。

誕生

——水面に揺れる木の葉のように。薄暗く、温かな”何か”に包まれて揺蕩い、それは小さく身動きした。コポリ、と気泡が弾ける音を聴く。けれどそれは幻聴だ。なぜならこの身は、まだ形を成していないのだから。

『愛しい子』

柔らかな、女性のものとおぼしき声が響いた。さわりさわりと、”何か”を隔てた向こう側で動いた気配がする。それに答えるように未熟な足のようなものでとん、と”何か”を蹴る真似をしてやれば、喜色ばんだ声音で女性が笑う。

『元気な子だねえ』

きやらきやらという幼い少女のような笑い声。その声を聞きながらそれは、はたと思いついた。

『あなたは私と私の旦那様、どちらに似るんだろうね』

「ここが、母の腹の内なかであるということに。

それから半年が経とうとする頃、第4次聖杯戦争の終結間もなく、それは誕生する。
名を、

「生まれてきてくれてありがとう、貴方の名前は——」

■ ■ という。

— — — — —

「キリツグー、置いてっちゃうよー」

そんな声が屋敷の中に響き渡る。冬の様相をまだ残す町に駆り出すために、コートを羽織った少女が玄関先で父親を待っていた。

「今行くよ、イリヤ」

小さな姫君の声に答えるように、奥から草臥れたトレンチコートを着た男が現れる。その横に、赤銅色の髪と琥珀色の瞳を持った少年が、表情を削ぎ落とした顔で寄り添っていた。

「シロウも行くの?」

「ああ、そうだよ。アイリは、舞弥と留守番をしているってさ」

「そっかー、じゃあお土産買ってこないと!ねー、シロウ?」

「……ん、ねえちゃん」

「——!」

少年はほんの小さな笑みを浮かべ、少女は心の底から嬉しいと言わんばかりに破願一

笑し、その様子を目にした男は人知れずこの幸せを噛み締める。

——こんな日が、来るなんて。

助けを求める誰かを救おうとして、救えるモノと救えないモノを機械的に選別してきた男は、もういない。犠牲になったモノが増えれば増えるほど、憤り、傷付き、嘆いていた男は、ついに積年の思いを断ち切り、イリヤと言う名の愛娘と、土郎と言う名の養子の、ただ一人の父親として今を生きている。だだっ広い武家屋敷には、二人の子供の他、最愛の妻と愛人とも言うべき女性が二人いて。それから、懇意になつた藤村組の娘も時折遊びにやって来る。

——世界の恒久的平和を願っていた。

そんな願いが霞んで見えるほど、今の生活が輝いている。この輝きを失うことは出来ず、自らの手で壊す決断力も、勇氣も、冷徹さも、今の男の中には既に存在していなかった。……魔術師殺しは既に、その牙を折られてしまつていた。

「行つてらつしやい、お氣を付けて」

「子供たちをよろしくね、キリツグ」

「ああ、行つてくるよ」

二人の女性に見送られ、両手を子供達の手と繋ぐ。慎ましいこの幸せが、これからもずっと続いてほしい。そう願う男の顔は穏やかだった。

「——まさか、とは思いましたが」

顎に手を当てそう呟いた現当主は、孫に当たる赤子を抱いた息子に視線を投げる。その視線に含まれた意図を図りかねた息子は首を傾げ、眉間に深いシワを刻んだ己の父親を見つめた。魔術の副作用で色が抜けたという白い髪、代々家系的に浅黒い肌、そして抜き身の刀を思わせる鋭い眼差しを持つ。それが結木家当主、結木時貞である。

「薄々感じていたことでしたが、こう現実になると、存外動揺するものですね。私の代で魔術師としての結末を終えるつもりでいましたが、そうもいなくなってしまうたようです」

眉間にシワこそ刻まれど、言葉とは裏腹にあまり動揺しているようには見えない。しかし、息子の貞雪も時貞の言葉で漸く事態を把握したようだった。

「それでは、この子は」

「ええ、間違いなく。優秀な魔術師となるでしょう」

赤子を抱く腕が強張り、貞雪は大きく目を見開く。魔術師の家に在りながら、その才を一切持たずにいた自分の子が、よもや魔術師の業を背負って生まれてくるなどと。誰が予想できただろう、妙に勘の鋭い父ですら、生まれた赤子の姿を見るまで、想像すらしていなかったというのに。

「そ、それは……」

「心穏やかではいられないでしょうが、これは事実です。この子の身には、私をも越える魔力が宿っている……他の者の手に渡れば悪用されかねない」

それほど危険なのだと、時貞は言う。けれど貞雪はそれを信じる事が出来なかった。魔術回路を持たぬ身ゆえ、腕の中にある温もりが、ただ平凡なものとしか思えない。だが、時貞の言葉に偽りはないのだろう。今までこんなにも深刻な表情をした父を見たことがなかった。ただ茫然と腕の中の我が子を見つめ、貞雪は呟く。

「神はこの子に、何を望んでいるだ……」

——それから4年が経つ。利発な子供は、歳不相応な成長をもつて周囲を驚かせた。特に根源に至ることに熱心な一族の者にすわ天才だ、すわ神童だなどと持て囃されながらも、子供は決して驕らずただ淡々と魔術を研鑽した。それが己に出来る唯一だとも言うように。

「告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

淡い色合いの魔力の奔流が子供の周囲を渦巻き、それに呼応して魔法陣が赤い光を灯す。

「誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者。汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——！」

顔を覆いたくなるような、鋭い光が迸る。暴風にも似た風が、怒涛の勢いで吹き抜けていった。そして、静寂が満ちる。かつり、と何かが地下室の石畳を叩く音が大きく響いた。

「ふ……ふふはははははー!!」

そこにいたのは、神代に生きた人類最古の王。豪華な鎧を纏い、高らかに笑いながら

彼は言う。

「相性などと言う目にも見えぬ曖昧なもので、よくもまあこの我を喚び寄せたものだ。貴様の事は知っている、千里眼で見通せぬ未来など^も在りはせぬのだから……なあ、召喚者よ。異なる世界で無惨にも死した魂よ。生まれ出でたその時から、既に世界に囚われていた哀れなる者よ。お前は、その命運から無様にも逃れるために、この我を呼んだのか」

否、と子供は言う。圧倒的な存在を前にして臆することなく、

「——自分自身だ。自分自身の可能性に挑むため、僕は貴方を喚び寄せた」

そう宣った。

これは、7組のマスターとサーヴァントが聖杯を求め戦う物語ではない。

これは、14組のマスターとサーヴァント達が集う大戦の物語でもない。

——これは、異端な少年とその導き手たる王、

そして、少年に絶対の忠誠を誓い、溢れ返るほどの愛を捧げた一人の赤枝の騎士の物語である。

物語は zero から始まり、Grand Order で事結ぶ。

王と子

「Kal Vas Xen Hur」

「ふん」

文字を刻んだ石を4つ、展開する。鋭利な刃のような風が駆け抜ける。しかし、その不可視の刃は一刀にて両断された。

「ツ、Kal Vas Xen Ylem!」

「ぬるいわ」

さらに4つ。大きな亀裂が走り柱がせり上がる。けれど、それは体勢を崩させるには物足りない。

「Kal Vas Xen Flam!!」

「ふはははははははははは!」

続けてもう一度、4つの石を眼前に展開。灼熱の塊が舞い上がる。だが、それすらものともせず、逆に大火を打ち返してみせた。

「僕の事おちよくつてますよね？」

「今更よな！」

悪びれる素振りも見せず、逆立てた黄金の髪を揺らして男が笑う。周囲は天変地異でも起きたかと思うほどに荒れ、身綺麗な男とのギャップが激しい。脱力した少年の姿に手詰まりを察し、男は少年との距離をつめた。少年はじやりと様々な石をポケットから取り出すだけ取り出し、憤慨した様子を隠すでもなく頭を掻く。

「くそ……っ」

その様子が実に面白いと、男は更に笑みを深める。

「やっぱり、付け焼き刃のルーンだと弱いですね……」

「ルーン魔術は門外漢であるが、我は魔術師オレ キャスターの素養もある。しかし、此度の召喚アーチャーは弓兵であるが故に」

「頼んでも御教授願えない、ということですね。分かってます……」

「左様、であるならば……その様に頬を膨らませるな。栗鼠か貴様は」

「……誰のせいだと」

男の性格をよく知る者がこの場にいれば、きつと二度見をするか眼を剥くだろう。それほどまでに、男はいつになく軽快な笑みを浮かべていた。それもこれも、自らを召喚せしめた少年が、想像以上に仕上がっていったためだ。歳に見合わない口調はやや気になるが、その生まれを思えば些末事である。男——ギルガメツシュは漸く笑いを納め、波紋を一つ浮かべてその中に少年が持つ石を無造作に投げ入れた。そして少年を担ぎ上げ、自動修復の刻印が起動を始めた修練場を背後に、地上へと続く階段に足を掛ける。

「さて、これからどうするか」

かつん、かつん、と石階段を踏む音が反響する中、ギルガメツシュは少年に問いかけた。その口角は、答えを聞くまでもないと言わんばかりに愉しげに歪められている。故

に、少年はあえて求められていないと思われる方の答えを紡ぐ。

「書庫に貴方の英雄譚があつたと思うので、それを読もうかと」

案の定、その言葉にギルガメッシュは顔を顰めた。

「止めておけ、あのようにつまらぬものを読んだとて、貴様には何の益もあるまい。読むならば他の物にせよ」

「そうですか？ 最古の王の物語を紐解くのも、大変有意義だと思うのですが」
「我がつまらぬ」

やはり、求められていた答えとは違つたらしい。ギルガメッシュの傲慢な言い様に、少年は憮然としてため息をつく。こういつた性格であることは知つていたが、いざ目の前にしてみると呆れるしかない。よくもまあ、優雅な紳士はこの男を召喚したものだ。更に言えば、あの外道神父はこの男と10年も一緒に過ごしていたというのだから、感服する。だが、ここでない世界の記憶を掘り起こしても、意味はない。ここに居るギルガメッシュは、あれらと同質ではあつても、同一ではないのだ。さて、では何をしよう。

思考を切り替えつつも、疲れた体に伝わる振動が眠気を誘う。何とか意識を保ちながら、他にやっておくべきことはないかと思案する。叙事詩を読み解くのは、別段今でなくともいい。むしろ、読み解くより本人に語ってもらえばよいのではないか。

「……ギル視点の、話が聞きたい……かなあ」

それは思うだけにとどまらず、自然と言葉となつて零れ落ちていた。堅苦しい言葉遣いは崩れ、無意識に落とされたそれをギルガメツシユは拾い上げる。こくり、こくり、と船をこぎ始めた少年に視線を落とし、一瞬の思案の後口を開く。

「では、寝物語に我が臣下の話でもしてやろう」

「ああ、それは……」

かすれた声が何事かをいい終える前に、ふつ、と腕の中の重みが増した。しかし、それはサーヴァントであるギルガメツシユには苦にもならない、軽やかな重みで。

「ふ……聞かせてやろうと言ったそばから寝落ちるとは、不敬な奴よ。しかし、如何に精

神が成熟してしようと、体が幼ければそれに引き摺られるのも道理よな」

猫のように胸元にすり寄ってくる少年を抱えなおし、最古の王はそう独り言ちる。小さく、静かに、穏やかに。

「眠れ、異邦の子。貴様が挑むと定めた己自身、その道程はさぞ険しかろう。故に、今は眠れ。——夢も見ぬ、深い眠りにな」

——それは、ある秋晴れの日。少年が王を現世に喚び寄せてから、約半年が過ぎた頃の出来事だ。